

特別対談シリーズ

「グローバルの流儀」

〈V o l . 29〉

「省・小・精」で顧客と社会の持続的発展に貢献

長野県諏訪市に本社を置くセイコーエプソンは、「EPSON」のブランドで知られる情報関連機器、精密機器のメーカーだ。すでに世界中でビジネスを展開するグローバル企業だが、さらなる事業の発展を目指し、革新的な技術や製品の開発に余念がない。インク代が平均90%もカットできるエコタンク搭載プ

リンターや、オフィスで紙の再生ができる「PaperLab（ペーパーラボ）」など、環境面、経済面ですぐれた製品はサステナビリティにも大きく貢献し、現代社会が求めるビジネスモデルともいえる。同社の今後の海外戦略や課題について、代表取締役社長 碓井稔氏に聞いた。



セイコーエプソン株式会社
代表取締役社長

碓井 稔氏

うすい みのる 1955年長野県生まれ。東京大学工学部卒。79年信州精器（現・セイコーエプソン）に入社、ミニプリンターなどの企画・設計を経験した後、インクジェットプリンター開発部門に異動。ピエゾ素子を使った小型・高性能なプリントヘッドの開発に取り組み、93年にマイクロピエゾテクノロジーを搭載したインクジェットプリンターの商品化に成功した。2002年に取締役、05年には全社の生産技術強化を目的に生産技術開発本部長就任、07年には研究開発本部長を兼任。同年常務取締役。08年の社長就任の翌年、長期ビジョンSE15を策定。16年には10年後のエプソンが向かうべき方向を示した長期ビジョンEpson25を策定した。2001年ヨハネス・グーテンベルク賞受賞。18年藍綬褒章受章。

2025年への長期ビジョン「Epson25」

森辺：まずは御社の事業内容と歴史をお聞かせください。

碓井：当社は情報関連機器や精密機器の開発、製造、販売および付帯するサービスを提供するメーカーです。当社の歴史は1942年、有限会社大和工業の創立に始まりました。56年に「ウォッチ事業」の根幹となるオリジナル設計機械式時計「セイコー マーベル」を発売。63年に、オリンピック史上初めての電子記録システム「プリンティングタイマー」を開発し、翌64年の東京オリンピックでは

セイコーグループが公式計時を担当しました。68年には初の海外生産拠点をシンガポールに設立し、75年には初の海外販売拠点をアメリカに設立。エプソンブランドを制定しました。98年の長野オリンピックではセイコーグループが公式計時を担当。2016年には、16年度から25年度までの長期ビジョン「Epson25」を策定しました。今後も創業から培ってきたエプソンのDNAともいえる「省・小・精」の技術をベースに、さらなる飛躍を目指していきます。



スパイダー・イニシアティブ株式会社
代表取締役社長兼 CEO

法政大学経営大学院イノベーション・マネジメント研究科 特任講師

森辺 一樹氏

もりべ かずき 1974年生まれ。幼少期をシンガポールで過ごす。アメリカン・スクール卒。帰国後、法政大学経営学部を卒業し、大手医療機器メーカーに入社。2002年、中国・香港にて、新興国に特化した市場調査会社を創業し代表取締役社長に就任。13年、市場調査会社を売却し、日本企業の海外販路構築を支援するスパイダー・イニシアティブ株式会社を設立。専門はグローバル・マーケティング。海外販路構築を強みとし、市場参入戦略やチャネル構築の支援を得意とする。大手を中心に17年間で1000社以上の新興国展開の支援実績を持つ。著書に、『「アジアで儲かる会社」に変わる30の方法』中経出版 [KADOKAWA]、『わかりやすい現地に寄り添うアジアビジネスの教科書』白桃書房などがある。



環境負荷低減、省エネ技術の充実で、サステナビリティを支えるオフィス機器

森辺：「省・小・精」とは、どのようなものでしょうか？

碓井：「省」とは、お客様のムダ、手間、時間、コストを徹底的に省き、いつでもどこでも簡単かつ便利に安心して製品を使える世界を創造すること。「小」とは、お客様の業務プロセスも含めた環境負荷を低減しながら、お客様と社会との持続的な発展をもたらすこと。「精」とは、お客様の生産性、正確さ、創造性というパフォーマンスを大幅に向上させること。この3つの価値を製品によって提供していきたいと考えています。

森辺：エコタンク搭載プリンターは約

150の国や地域で販売され、世界累計販売台数は3000万を突破しましたね。

碓井：近年、注目されている「エコタンク」は、従来のカートリッジ方式とは全く異なり、インクジェットプリンター本体に大容量のインクタンクを搭載し、ボトルからインクを注入する方式です。エコタンク搭載プリンターは、環境にやさしく経済的な点がメリット。まず環境面では、レーザープリンターやLEDプリンターなどの電子写真方式のプリンターの場合、トナーからPM2.5をはじめとする微細粉塵が発生するといわれますが、インクジェットならそのような心配はありません。また経済面では、エコタンク搭載プリンターならカラープリント1枚が1円ぐらいでできるため、大幅な

経費削減になります。プリント代を安くすることで、自由に知的創造性を発揮することができますよね。結果的に、経済面だけではなく、エネルギーも非常に少ないプリンターを提供できるようになりました。インクジェットであれば、従来の電子写真方式に比べて8分の1のエネルギーでプリントできます。一般的なオフィスの電力のうち、8%ぐらいはプリンターや複写機が占めているといわれます。これが8分の1に減らせるとなると、全体の電力の約7%が削減でき、空調をインバーターに変えるぐらいの効果があります。そういう意味では桁違いの性能だといえるでしょう。

森辺：「PaperLab」も環境循環型社会に貢献する製品ですね。

碓井：オフィスで紙の再生ができる「PaperLab」は、使用済みの紙の文書情報を完全に抹消した上で新たな紙を生産するという、新しい資源サイクルを提案した製品です。紙の購入量を減らし、廃棄や回収の輸送にかかるCO₂の削減も期待できます。当社の強みである「省・小・精」の技術に則って開発を進めた結果、エコタンクやPaperLabが生まれました。

森辺：サステナビリティを狙って開発したのではなく、御社のDNAともいえる精神に則って開発を進めた結果、サステナビリティにつながる製品ができたと言えます。

世界の人々にとって「なくてはならない会社」へ

森辺：御社はすでにグローバルに事業を展開していますが、今後のグローバル戦略や課題をお聞かせください。

碓井：現在、数多くの国と地域に販売・サービス拠点や、開発・生産拠点を構えています。これからはアフリカをはじめ

め、新たな市場が生まれる、生活水準が高くなっていくエマージング地域にしっかりアクセスしていくことが必要になるでしょう。課題として挙げられるのは、グローバル人材の拡充ですね。これまでには企画や研究開発は日本人が中心になっ

て担ってきましたが、世界にもそれぞれの国や地域にさまざまな能力を持った方がいるので、こうした人材の英知を結集することで、当社の価値をさらに高めていけると考えています。日本に本社があっても、グローバルな人材がそれぞれの国や地域で最良の状態での力を発揮できるように、ハード面を整えなければなりませんね。

森辺：数十年後の御社は、人や社会に

とってどのような企業になっていると思われますか？

碓井：当社が経営理念の中に掲げているのは、「世界の人々にとって、なくてはならない会社でありたい」ということです。人々の豊かで幸せな生活に貢献するために、自分たちの頭や感覚で社会課題に正面から向き合い、「省・小・精」の技術に立脚した新しい価値を数十年後も提供し続けます。